児童養護施設で暮らす子どもが語る家族
―中学生へのインタビューから―

宇田智佳（大阪大学・院）

1. 問題の所在

本報告の目的は、児童養護施設で生活をする子どもたちへのインタビューから、彼女らが家族との関係をどのように捉えているのかを、時間的経過やアンビバレントな感情など、家族への思いの変化に着目して明らかにすることである。

児童養護施設を主題とした研究では、貧困や虐待など、児童養護施設へ入所する子どもたちの成育家族が抱える複層的な困難や不利の状況が明らかにされてきた（堀場 2013）。そのような困難や不利は子どもたちの施設入所後も継続することがあり、子どもたちにとって「足枷」や「負荷」として家族が存在しうることも指摘されてきた（田中 2004・永野 2017）。しかし、これまでの研究では、家族へのまなざしが固定的に捉えられており、時間的経過や、交流を通して子どもたちが抱く感情の変化は見落とされてきた。

しかし、「自分たちの生活が終始一貫して問題を抱えたものとして理解されることはな」（Gubrium & Holstein 訳書 1997：70）いという指摘を踏まえると、さまざまな文脈で変化する家族との関係を描き出すことも重要である。

2. 研究方法

本報告では、児童養護施設で生活する子どもたちへのインタビューによって得られたデータを分析していく。報告者は、2017 年 9 月より関西圏の児童養護施設でフィールドワークを継続して行っており、そのうち、2021 年 7 月から 2022 年 4 月にかけては中学生 3 名へのインタビューを行った。本報告では、そうしたインタビューによって得られた家族との関係についての語りから、彼女らが家族をどのように捉えているのかを検討していく。

3. 結果と考察

彼女らは、施設入所に関して、家族の状況を貧困や虐待と結び付けて語る。しかし、たとえば現在は暴力がないという時間の変化や、施設生活では衣食住が確保されているという自らの置かれた状況によって、家族の捉え方は変化していた。また、そうした変化もあり、家族を目標にするなど、ポジティブに捉えていた。

一方で、家族が抱える困難の解消されにくさや、高校進学や交流に際しての家族との関わりなどにおいては、家族と距離を置くような語りと同時に、そうした家族関係のなかで自己の再定義もなされていた。

以上から、文脈によって、児童養護施設で暮らす子どもたちの家族についての語りが変化していた。こうしたことは、家族との関係を固定的に捉えるのではなく、家族との関係のなかで、児童養護施設で生活をする子どもたちが絶えずアンビバレントな感情を抱く側面を捉える必要性を示している。

参考文献

Gubrium,J.F. & Hosltein, J.A.,1990, What Is Family, Mayfield Publishing Company. (仲河伸俊・湯川純幸・鮎川潤訳,1997,『家族とは何か』, 新曜社).
堀場純矢、2013、『階層性からみた現代日本の児童養護問題』明石書店。
永野咲、2017、『社会的養護のもとで育つ若者の「ライフチャンス」 - 選択肢とつながりの保障、「生の不安定さ」からの解放を求めて―』明石書店。
田中理絵、2004、『家庭崩壊と子どものスティグマ ―家族崩壊後の子どもの社会化研究』九州大学出版。

（キーワード：児童養護施設、家族、インタビュー）